

Fragmentvertaling

De naam van de auteur : Marga Minco

De titel van het boek : Het bittere kruid – een kleine kroniek

De Pagina's van de fragmentvertaling : blz. 34 t/m 42 (drie hoofdstukken: Verzegeld, In bewaring, en Thuiskomst)

De naam van de vertaalster : Yumi Nishimura

*Behalve deze fragmentvertaling heb ik voor Japanse uitgeverijen wat informatie over Marga Minco en haar werk gemaakt als mijn voorstel om een Japanse editie met haar meesterstuk “Het bittere kruid – een kleine kloniek” en haar twee andere verhalen te maken.

〈日本語一部試訳について〉

作者名 : マルガ・ミンコ

作品名 : 苦い薬草——小さな年代記 (Het bittere kruid – een kleine kroniek)

一部試訳の頁 : 原書 P. 34~P. 42 (その 3 章のタイトル : 「封印された」、「預かっておく」、「両親のもとへ」)

翻訳者名 : 西村由美

*この一部試訳のほかに、「マルガ・ミンコと彼女の作品について——代表作『苦い薬草—小さな年代記』及び他二編の作品選集出版への提案として——」(表紙を含めて 3 枚) を別途作成しました。

併せてご高覧いただけると幸いです。

封印された

わたしたちは、ザーフメイアーさんの知人のところに行く必要はなくなった。というのは、兄のデイヴも疾病証明をもらったからだ。今、部屋にはベッドが二台あり、兄とわたしは、一日中パジャマ姿で家の中を歩きまわっていた。そうすれば、玄関のベルが鳴るとすぐに、そのままベッドに飛びこむことができる。兄嫁のロッテは、わたしたちの世話をするために家に残ることを許された。けれども、両親はアムステルダムに行くことになった。二人は五十歳以上だったからだ。

新しい条例ができたのだ。二人が持っていけるは、衣類の入ったトランク一個だけ。そして、二人が家を出る前に、そのトランクと二人が住んでいた部屋は封印されることになった。

父さんが母さんにきいた。

「何も忘れものはないな？」

「ええ、なんにも」と答えながら、母さんは、部屋を出たり入ったりした。まるで、何かもって持っていけるものがないか、と探すかのように。

父さんは窓から外を眺めていた。

「三時前に来るそうだ」と言って、腕時計を見た。「もう、五分過ぎてる」

「ねえ、このトランク、また開けなくちゃいけないのかしら？」母さんがきいた。

「そんなことはあるまい」と父さん。「そんな時間はないはずだ。封印シールを貼るだけだろうよ。おや、やってきた」

黒い革の上着を着た男二人が、木戸を開けて玄関のベルを押した。デイヴとわたしは、すでにベッドに横になっていた。ロッテが玄関に行った。二人の男は何も言わずに中へ入ってきた。

母さんの声が聞こえた。

「このトランク、また開けるんですか？」

男の一人が言った。

「われわれは、そのために来たんだ」

わたしは、前もって見て知っていたが、母さんの荷物のつめ方はとてもいねいだった。だが、男たちはそれをぜんぶひっくり返すだろう。トランクの底に何か取りのぞかなければならないものがあるかのように。そのとき、わたしは、戦争直前に家族で行ったベルギーへの旅を思い出した。帰りの道中、母さんはとてもそわそわして、「トランクを開けさせられるかしら？」と、五分おきに父さんにきいていた。何をそんなにそわそわしているのか、最初は、わたしにはわからなかった。ところが、そのあと、税関で、母さんのトランクがくまなく調べられたときに、その理由がわかった。トランクの中にオーデコロンの大きなびんが二本入っていたのだ。輸入関税を支払わなければならない、結局、母さんはオランダで買うのと同じ金額を支払うことになった。

男たちが行ってしまってから、わたしたちはトランクに貼られたシールを見た。わたしは

言った。

「このシールをはがしてもう少し何かトランクに入れるのは、すごくかんたんよ。あとから、糊でびったり貼れる」

わたしはシールの端っこをいじってみた。ほんとうに、かんたんにはがれた。

「よしなさい」と父さん。「もうなんにもいらぬ。どのみち、そう長くは留守をすることにはならぬだろう」

父さんは、こんな不滅の楽観主義を持っていた。そして、それを聞くと、すぐにその気にさせられた。「この状況をどう思う？」と、わたしは何度もきいた。それは、ただ、自分を安心させてくれることが聞けるだろうと、前もってわかっていたからだ。ほかの人たちが教えてくれたポーランドについての話にわたしが脅えていると、父さんはいつも言った。

「その心配はないだろうよ」

父さん自身がそう信じていたのか、それとも、わたしたちを元気づけさせるために言ってくれただけだったのか、わたしにはわからない。

「いいかい」と父さん。「もちろん、戦争関連の産業に若い人たちが必要とされている。男はみんな軍隊に入ってしまったからな。年寄りもアムステルダムに住まなきゃならぬ。あそこにまたゲットー（ユダヤ人を隔離して居住させた地域）を作ろうとしているんだ。大きなユダヤ人地区になるだろうよ」

「こんなことが長くつづきませんように」と、母さんが言った。

母さんが姉のベティのことを考えているのをわたしは知っていた。ラズビア（一斉検挙）の数日後にわたしたちがベティから受けとった葉書には、〈わたしは元気。心配しないで〉と書いてあった。ひどく長くつづくことがなければ、ベティは耐えぬくことができるだろう。みんなは言った。

「彼女は、しっかりしていて健康だ。きっと、がんばって切りぬけることができるだろう」

両親が行ってしまってから、ロッテとわたしは廊下に立って、両親の部屋のドアの側柱に貼られたシールを見た。部屋は、まるで見てはならないものが隠されているかのように、どこか謎めいた感じがした。ロッテが言った。

「かんたんに入れるわよ」

ロッテは、つめでドアのすき間に貼られたシールに切れ目を入れ、半分に裂いた。わたしたちは、見知らぬ部屋に足を踏み入れたような気がした。だれかにわたしたちの気配を聞かれるのを怖れるかのように用心深く、テーブルの周囲を歩き、いすや小さな戸棚をちょっと触った。ロッテが小声で言った。

「あの人たち、すべて書きとめていった。わたしたち、もう何も持ち出せない」

わたしは、小さな花びんを動かして、同じく小声で言った。

「もうわたしたちのものじゃないみたいね。どうしてかな？」

「あの人たちが、その手でそこら中を触っていったからよ」とロッテ。

わたしたちは部屋を出て、裂けたシールを貼った。

預かっておく

デイヴがわたしに言った。

「あんなに何ヶ月もおまえがベッドの中で持ちこたえられたなんて、おれには謎だよ」
デイヴとわたしは、もう何週間もパジャマで歩きまわり、ときには一日中ベッドに横になっていた。というのは、家を調べてまわっているという噂があったから。

「ああ、無理やりにそうさせられていたら……」と、わたし。

「うん。そしたら、もちろん慣れるんだろうな。星をつけろとか、ラジオを持つなとかと同じようなことなんだろうな」

「だけど、病院ではいつも、わたしのためだって感じのほうが強かった」

そのとき、とつぜん、外で大きな声がした。

「ラケット貸してくれな—い？」

庭へ出るガラス戸が開いていた。隣人の娘が柵の上から顔をのぞかせて、笑顔で中を見ていた。

「いいよ！」わたしは大きな声で返事をした。

娘は柵を越えて、うちの庭に飛びこんできた。

「よかった！」と言って、娘は花柄の、ふんわりしたスカートについた砂をはたいた。

「わたし必要ないから。安心して使って」わたしは言った。

「あんたたち、もちろん今は、テニスをしないでしょ？」

「うん、しない。今はね」とデイヴ。

「どっちみち」と、娘はわたしにむかって言った。「お医者にとめられてるんでしょ」

「そのとおりよ」とわたし。「ちょっとわたしの部屋に来ない？」

わたしたちは二階へ上がった。わたしが、戸棚の中のラケットを探している間、娘は、わたしの本をじろじろ見ながら言った。

「これ、すてき！」

わたしはふり返った。本のことを言っているのだと思った。ところが、彼女は陶器のネコを持っていた。

「あげるわよ。わたしたち、ここにはもう長くいられないだろうから」

「うれしい」と娘。「このすてきなものをぜんぶ置いていくななんて、もったいないものね」

「ほんとうね。もっとほかにも持っていってもいいのよ」

娘は部屋を歩きまわった。花びん、木製のトレイ、古い銅製の小箱、そのほか小さいものを手にとった。そして、大声をあげた。

「まあ、このバッグ！」

娘は手に持っているものをテーブルの上におき、いすにかかっていた革のバッグをつかんだ。いろんな角度からそれをながめ、開けて、中にあるものをとりだした。

「ほら、ぜんぶここに入れよう。すてきなバッグね」

「わたしの姉さんのよ。姉さんが自分で作ったの」

「レザークラフトが得意だったの？」娘がきいた。

「そう、姉さんは、革でいろいろ作った。すごく上手だった」

「わたし、あんたのために預かってあげる」

「わかった」

「でも、時々、使ってもいいでしょ？」

「ええ、どうぞ」

ラケットとバッグ、それにほかのものも両腕に抱えて、娘は、まだ何か忘れものがあるかのように、わたしの部屋を見まわした。そして言った。

「あのタイル……」

わたしは、壁に飾ったそのタイルをとって、ほかのものの上のせてから言った。

「ドアを開けてあげるね」

「自分でバッグを持って来ればよかったけど」と、娘は笑いながら言った。

「でも、こんなにたくさん持って帰ることになるなんて、思いもよらなかったでしょ。だって、ラケットを借りに来ただけだったんじゃない？」

「もちろんよ。あなたのを使わせてもらえることになって、よかった。いいラケットね。わたし、思ったの。ちょっと頼んでみようって。だって、これが戸棚に入ったままで、あんたたちが当分の間テニスすることがなかったら、もったいないでしょ」

わたしは、娘といっしょに階段を降りて、外へ出るドアを彼女のために開けてやった。

「これでいい？」わたしはきいた。

「あっ、そうだ」と、娘は、ためらうようなようすで玄関マットの上に突っ立った。そして、わたしにきいた。

「ねっ、わたしの代わりに、ちょっと外のようすを見てくれない？ この頃はうんと気をつけなくちゃならないもの……わたしがこんな格好であんたたちの家から出るのを見られたら……どうなるかわからない……わざわざ災いを招くことはないでしょう」

わたしは、パジャマの上にコートをさっと着て、通りの左右を見てから、言った。

「だれもいない」

「じゃあ、さよなら」

娘はそう言うと、急いで垣根から出て、近くの家の中庭に走った。娘の腕には姉のバッグがぶら下がっていた。陶器のネコのしっぽが、そのバッグから突き出ていた。

両親のもとへ

ある日の午後、わたしは兄さんにむかって言った。

「ねえ、わかる？ わたしがこれから何をしようとしてるか……？ わたし、アムステルダムに行くことにした！」

すると、ロッテが言った。

「どうしてそんなこと思いついたの？ すごく無分別に思えるけど」

「もう、うんざりよ。わたし、気分を変えたいの」

「その気持ちわかるよ」とデイヴ。「たぶん、アムステルダムはいいかもしれない。ぼくたちも行かなくっちゃ」

「でも、どうやって行くの？」ロッテがたずねる。

「コートから星をとって、列車に乗る。すごくかんたんよ」

「検問が厳しくなければね」とデイヴ。

「それには気をつける。とにかく行く」わたしは言った。

わたしは、両親を訪ねたかった。両親からは手紙が届き、〈わたしたちは運がよかった〉と知らせてきた。サルファティ通りにある庭付きの大きな家の数部屋に住んでいるとのことだった。〈何人か知りあいの人に出会った。みんな同じ地区に住んでいる〉と、父さんは書いていた。

両親の手紙から察して、二人は居心地悪い思いはしていなくとも、子どもの一人がそばに来れば、喜ぶことだろう。特に今は、ベティのことがますます心配になっているだろうから。その後、ベティからは、まったくなんの便りもないんだもの。

暗くなったら行こう。わたしは、初めて旅に出かける子どものように興奮していた。もうすぐ両親に再会できるだろうという理由からだけでなく、まるですべてがふつうであるかのように行動できるのだから。けれども、駅へ行く途中、わたしは通りの角に出るたびに、警官がいて、検問しているのでは……と思った。そして、乏しい光に照らされた駅の構内では、みんなが探るように自分を見ているように思えた。列車の中で、わたしは女の人の隣の隅っこにひっそりと沈み込むようにすわった。その人は赤ん坊を眠らせようと、膝にのせて揺らしていた。わたしのむかひの男の人はパイプをふかしながら、外を見ていた。何も見えなかった。列車は暗い景色の中を走り、わたしは不安を忘れた。それどころか、楽しい気持ちになりはじめた。車輪の単調なリズムに合わせてハミングせずにいられなかった。

ベティとわたしがまだ子どものころ、バカンスを何度もアムステルダムで過ごしたときのことを思い出された。列車の中で、わたしたち二人は列車のリズムに合わせてどっちがよりすてきなことばを思いつくかを競った。「アム・ステル・ダムへっ、それと・ロッ・テル・ダムへっ、サンド・ウィッチ・もって、それと・おおきな・クッキー！」二人は列車のどろきに合わせて、時には何キロもつづけてそうやって歌った。

アムステルダムは暗くて、小雨が降っていた。通りには、まだかなりたくさんの方がいた。

人びとは、ダムラックの広い歩道を影のように歩いていた。わたしのほうを見る人はいなかった。わたしのあとについてくる人もいない。サルファティ通りでは、家を見つけるのに苦労した。木々の下は、ほぼすっかり暗闇だった。わたしは、ポーチの階段をのぼって、家の番号を探そうとした。ようやく見つかった。かなり奥の方だ。玄関の呼び鈴に手をやって、考え直した。このままベルを鳴らしていいかな……。ベルの音に家じゅうの人が驚くだろう。そこで、まず、ほんのしばらく口笛を吹いてみた。けれども、聞こえた人はいなかったらしい。それならば、呼び鈴を押すしかない。わたしは、そっと、つづけて三回押した。廊下にだれかが出てくる音がするとすぐに、ドアの郵便受けから自分の名を大声で言った。

すると、父さんの驚いた声が出た。

「おまえなのか？」

父さんは、ドアを少し開けてわたしを中に入れてくれた。

わたしは陽気な声で言った。

「ちょっとようすを見に来たの」

母さんが言った。

「この子ったら、どうしてそんな勇気があったの！」

「どうってことなかった」とわたし。

その家のほかの住人たちは、深刻なことが起きたわけではないとわかってから、わたしを見に出てきた。

だれかがきいた。

「そのまま列車に乗ってきたのかい？」

「身分証明書を見せろって、だれにも言われなかった？」

「窓口で切符を買えたの？」

みんなは、わたしのコートの星のあとをまるで見物に値するものを見るかのようにじっと見た。だれかが言った。

「まだ、黄色の糸が残ってるじゃないの」

母さんが言った。

「これからまたつけなくちゃね」

「列車は混んでたか？」と、父さんがきく。

みんなは、まるでわたしが長い旅をしてきたか、外国からでもやってきたかのように質問攻めにした。

母さんは、「きっと、お腹がすいてるわね」と言うと、部屋を出て、薄切りのパンを二枚持ってきた。

わたしはちっともお腹がすいてなかったけれど、母さんをつっかりさせまいと思って、食べはじめた。

みんなはテーブルのまわりに立って、じっとこちらを見ていた。その顔は、わたしが、パンをぜんぶ食べる——ひどく苦労したのだが——のをとても喜び、満足そうだった。